

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19530440

研究課題名（和文） 中国に生きる残留日本人・日系人  
—ポスト・コロニアル時代の「国民」と「人間」—

研究課題名（英文） War displaced Japanese in Postcolonial China

研究代表者

浅野 慎一 (ASANO SHINNICHI)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究所・教授

研究者番号：40202593

研究成果の概要（和文）：ポスト・コロニアル時代の中国に在住し、日本と中国の越境的・歴史的主体として生きた「中国残留日本人・日系人」の生活と社会意識に関するモノグラフ研究である。日本と中国の双方で約 250 名の関係者にインテンシヴな面接調査を実施し、それによって得られた第 1 次資料に基づいて、実態を解明した。特にグローバリゼーションとポスト・コロニアリズム、およびナショナル・アイデンティティと普遍的な人間としての「生命＝生活」の緊張関係を剔出した。

研究成果の概要（英文）：This is a monograph study on the life and social consciousness of the war displaced Japanese in postcolonial China. They have lived as actors of historical social change, crossing the borders. Their life involves the conflicts both between globalism and postcolonialism, and between nationalism and humanism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：残留日本人、エスニシティ、国民国家、ナショナリズム

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 中国残留日本人・日系人(中国残留孤児・婦人、およびその二世・三世等)はしばしば「中国帰国者」とも呼ばれ、日本への帰国後の社会的適応・異文化共生の主体として捉え

られがちであった。また、彼・彼女らはしばしば帝国主義・「満洲」支配の歴史的文脈でのみ位置づけられがちであった。これに対し、本研究では、ポスト・コロニアル時代の中国に在住し、日本と中国の越境的・歴史的主体

として生きた中国残留日本人・日系人の生活と社会意識の解明を試みた。

(2)このような視点は、本研究課題の申請当時、全国各地で展開していた中国残留孤児の国家賠償訴訟における実践的争点とも密接に関わる理論的課題であった。国家賠償訴訟では、残留孤児の被害が単なる戦争被害か、それとも戦後のポスト・コロニアルな矛盾を孕む被害であるのかが鋭く問われた。また残留孤児の要求が、単なる日本社会への適応、異文化摩擦の解消なのか、それとも「生命＝生活」の発展的再生産をかけた日本社会の構造的変革であるのかも、基本的な争点となった。本研究は、もちろん直接、法的判断を下すものではない。しかしその前提となる事実を、当事者の証言に基づいて検証・確定するものでもあった。

(3)本研究は理論的には、従来の日本のエスニシティ研究における弱点の克服を目指す試みでもあった。研究代表者がこれまで研究してきた外国人労働者は、多くの深刻な矛盾を抱えつつ、しかし少なくともある局面では肉体的強靱さを含む様々な「能力」を駆使して国境を超え、自らの将来を模索する「強い」主体であった。しかし、近代社会における排除・差別の最大の指標が「国境(ナショナリズム)」と「能力(メリトクラシー)」である以上、「能力」による序列を前提とした「弱者救済」は、真の近代批判としての社会変動・変革への胎動を見失い、近代的パターンリズムに陥りかねない。残留日本人・日系人は、「能力」ではなく、「血統」に基づいて国境を越えた。彼・彼女らの多くは来日後、労働市場からも排除され、最底辺の生活を強いられてきた。非識字者・高齢障害者も多い。中国在住者は生活保護すらなく、一層深刻な状況にある。このような彼・彼女らを単なる「救済の対象」ではなく、歴史的な社会変動を担う主体と捉え、その「潜在能力」を実証的に解明できれば、日本のエスニシティ研究全体にとっても有意義な知見となりうるであろう。

(4)このことは、社会の歴史的変動に即してみれば、ポスト・コロニアル時代をいかに捉えるか、という問題でもある。従来、ニューカマーの外国人の研究は多くの場合、帝国主義との関連を問わず、したがってポスト・コロニアルの明確な歴史認識をもたないまま、現象記述的になされてきた。一方、オールドカマーの研究は帝国主義の歴史を重視しつつ、それゆえまたポスト・コロニアルな諸変化を捉える新たな歴史的視点を十全に確立しえていないように思われる。残留日本人は、いうまでもなく帝国主義とその崩壊の渦中

で生み出され、ポスト・コロニアル状況下の東西冷戦・グローバリゼーションの只中で――しかも中国と日本の双方の社会において、様々な苦難を体験してきた越境的主体である。彼・彼女らは、「日本人」と「人間」、国民化と脱国民化の緊張関係を一身に体現し、双方の矛盾を乗り越えることによってしか、ありのままの自分を生きることができない。こうした矛盾に満ちた特性をもつ残留日本人・日系人の潜在能力の解明もまた、日本のエスニシティ研究の進展に新たな視座を提供することになると思われる。

## 2. 研究の目的

ポスト・コロニアル時代の中国に在住し、日本と中国の越境的主体として生きた中国残留日本人・日系人の生活と社会意識を実証的に解明し、その歴史・社会的意義を考察する。

## 3. 研究の方法

(1)本研究の最も主要な方法は、日本・中国の双方で実施したインテンシブな面接聞き取り調査である。約 250 名の関係者(残留日本人、その配偶者・2世・3世、養父母等)を対象として、生活史・生活過程・社会諸関係・社会意識をトータルかつ詳細に把握するインタビューを実施した。中国在住者が約 100 名、日本居住者が約 150 名である。使用言語は主に中国語、1 人当たりの聞き取り時間は 2-4 時間程度である。それ以外に、日本居住者については、日常的に多くの場面で接触し、参与観察を行なった。従来、これほど膨大な第 1 次資料の収集がなされたことは、この分野では皆無といってよい。

(2)既存研究の検討に際しては、特に中国での当該分野の到達点ともいえる著作(関亜新・張志坤『日本遺孤調査研究』(社会科学文献出版社、2005)を全訳し、日本で刊行した。同書の最大の特徴は、中国に固有の、しかも非公開の個人「档案」原本を第 1 次資料として使用したことにある。こうした資料は日本側では決して入手しえず、中国側でもその閲覧がこれほどの規模で許可されたのは空前のことである。また同書は何より、日本側で情報が最も欠落しがちな、第 2 次世界大戦以降の中国における残留日本人・日系人の生活と意識を克明に描き出した文献であり、本研究課題の遂行に極めて有益な資料となった。

(3)以上の諸資料に基づき、中国残留日本人・日系人の生活と社会意識を実証的に解明し、その歴史・社会的意義を考察した。その

際、方法論的には、特にグローバリゼーションとポスト・コロニアリズム、およびナショナル・アイデンティティと普遍的な人間としての「生命＝生活」の緊張関係を剔出するよう努めた。

(4) なお本研究計画の補完的な調査研究として、夜間中学校の生徒に対するアンケート調査を実施した。夜間中学の生徒の中には、多数の残留日本人・日系人が含まれている。彼・彼女らの帰国後の生活を現実的に支えている数少ない公的機関の一つが、夜間中学である。本研究では、近畿地区のすべての夜間中学 18 校で調査を実施し、747 名の回答を得た。

#### 4. 研究成果

(1) 残留日本人の「戦争被害」とは、日本敗戦に伴う「満州国」での混乱、および敗戦後も「満洲」の地に遺棄・放置されたことにより、深刻な生命の危機に陥り、また肉親と死別・離別して孤児等になることを余儀なくされたことにある。これらの被害は、日本政府の国策・軍事戦略・「棄民」政策の産物である。しかし同時にそれは、ソ連軍や連合軍 (GHQ)、さらに戦後の東西冷戦、ポスト・コロニアルの世界社会構造によっても創出された。しかもその被害の大半は、戦時中に被ったものというより、日本敗戦以降、不適切な戦後処理・「棄民」政策によって生じたものであり、日本国民一般の「戦争被害」とは異質な特殊性をもっている。また、こうした特殊な「戦後処理被害」は、個々人の個別事情・偶然性を越え、残留日本人に共通かつ固有なものであるが、その内部には、敗戦時の居住地、およびわずかな年齢差によって、構造的に生み出された多様性を孕む。すなわち黒龍江省等の辺境の農村居住者ほど、また年少者ほど、その被害は深刻で生存率は低いのである。

(2) 日本敗戦後、中国に取り残された残留日本人孤児は、中国人の養父母に育てられ、就学・就職・結婚をし、子供を産み育て、「生命＝生活」を繋いできた。ただしそこには、養父母による虐待や過酷な児童労働、劣悪な教育環境、内戦や大飢饉による窮乏と飢餓、国家政策による強制的転職、日本人の血統であることを口実とした差別や迫害等、日本に在住する同世代の日本人が体験してこなかった多くの苦難が刻印されている。こうした苦難は、日本による侵略戦争の単なる残滓ではない。したがってその苦難・迫害を、「侵略戦争のナショナル・ヒストリー」の延長線上で、「加害／被害」の二元論として把握することには限界がある。むしろそれらは、戦

後の東西冷戦、ポスト・コロニアルの世界社会システムが創出した新たな苦難である。したがってまた、残留日本人のみならず、多くの中国人が遭遇・直面してきた苦難でもある。そして残留日本人が苦難を乗り越え、「生命＝生活」を繋いでくることができたのは、そうした中国人民衆との共同・連帯があったからにほかならない。

(3) 残留日本人孤児の肉親捜しにおいては、孤児の年齢という生得的要素が決定的な分岐点となる。日本敗戦時に年長であった残留孤児は、身元に関する記憶・情報が豊富で、肉親が判明しやすい。これに対し、年少者は記憶・情報が少なく、身元判明が困難である。また残留孤児の肉親捜しにおいて日本政府が果たした積極的役割は、極めて限定的である。むしろ日本政府は、残留孤児の肉親捜しに様々な困難を作り出した。とりわけ日本政府が訪日調査の参加資格として、現実と乖離した高いハードル——具体的な手がかり・証拠の提出——を課したことは、身元情報が少ない年少の孤児の肉親探しの取り組みを決定的に遅延させた。もともと身元情報が豊富な年長の孤児は、訪日調査を待つまでもなく、自主調査で肉親が判明していた。身元情報が乏しい孤児のために行なわれたはずの訪日調査の参加資格に、具体的な身元情報の提出を課すことは、大きな矛盾であった。さらに残留孤児の肉親探しの動機は、血統主義的国民統合の論理ではなく、むしろ帝国主義やポスト・コロニアルの国民国家システムに対する批判であり、人間としての普遍主義であった。それはまた単なる生物的血統に収斂する自然本質主義でもなく、自然と社会の統一的把握においてのみ理解しうる「生命＝生活」の論理にほかならなかった。

(4) 残留日本人孤児の日本への永住帰国の時期、およびその遅延の最大の規定要因は、日本政府の受入政策にあった。またそうした日本政府の消極的姿勢の背後には、ポスト・コロニアルの世界社会構造、および国家と社会の分離や私的所有を前提とする近代社会の構造が横たわっていた。さらに見、残留孤児の帰国の促進要因とみなされがちな血統主義的ナショナリズムも、実は残留孤児の日本人としての認定・帰国をますます遅延させる要因として機能してきた。戸籍・肉親の確認に固執する日本政府の血統主義的ナショナリズムは、一方で残留孤児の国籍認定・帰国許可を極端に狭く制限し、他方で残留孤児問題を私事に封じ込め、国家責任を回避するための政治的梃子にほかならなかった。残留孤児の国籍変更は、諸個人の選択というより、国家間システムによる一方的な決定であった。しかもそれは、残留孤児が戦争・植民地

政策が生み出した特殊な日本人であるという事実を、日本政府が条理として認めていたことを物語る。そして残留孤児の永住帰国の動機もまた、血統主義的ナショナリズムや戦後処理の枠組を超えて、人間の普遍的な「生命＝生活」の発展的再生産、およびポスト・コロニアルの世界社会における越境にあった。

(5) 以上のような日本帰国以前の残留日本人孤児をめぐる政治・社会状況は、彼・彼女らの帰国後の生活と社会意識にも多大な影響を刻印した。彼・彼女らの帰国後の生活の過酷さは、主要には日本政府の政策に基づく帰国の遅延に起因する。しかも日本政府は、帰国後の生活支援にも積極的ではなく、残留日本人自身の個人的努力に依存した問題解決を図った。しかしそれは全く非現実でたちまち破綻した。そこで日本政府は、パターナリスティックな恩恵的救済を試みたが、これも残留日本人・日系人の生活に新たな矛盾を付加的に刻印した。一方、残留日本人は、こうした恩恵的救済の享受者に甘んじることなく、能動的・主体的に自らの生活を維持・発展させてきた。彼・彼女らは、日本政府が一般の日本国民に提供する公的な教育・職業斡旋・年金制度等からは排除されたが、自らの個人的・集団的努力に依拠して様々な問題を解決し、自らの「生命＝生活」を維持・発展させてきた。こうした彼・彼女らの主体性は、一国単位の「単一民族神話」に基づく閉鎖的社会システムやそれを前提とした「自立・適応」ではなく、既存の社会システムを批判し、変革へと至らざるを得ない諸要素を孕んでいた。

(6) 残留日本人孤児は、日本政府の責任を問う国家賠償訴訟において、自らの要求を「日本の地で、日本人として人間らしく生きる権利」と定式化した。ここには2つの要素が含まれる。一つは、戦後の日本国民としての基本的な生活と権利の回復である。彼・彼女らは単に戦争被害者・経済的困窮者であるばかりでなく、「戦後の日本人として生きる権利」を今日に至るまで保障されず、放置され続けてきた日本国民であった。いま一つは、エスニシティ・国籍の壁を超え、人間らしく生きることができる日本社会の構築である。ここでは、同質的・画一的な「国民」を前提とした個別的・経済的な救済にとどまらず、多様性を尊重し、しかも同じ人間として平等に尊厳をもって生きることができる社会の模索がみられる。その意味で残留日本人・日系人問題は、単に過去の清算にとどまらず、ポスト・コロニアルの日本社会の変革へとつながっていく課題でもある。

(7) 以上の諸課題は、残留日本人 2 世の生活と社会意識においても再生産されつつある。2 世の年齢・学歴・日本語能力・職業等は極めて多様だが、国費で 1 世と同伴帰国した 2 世、および後に私費で呼び寄せられた 2 世の間には明白な差異・格差がある。日本政府は 20 歳以上・既婚の 2 世の国費による同伴帰国を認めなかった。また帰国後も、私費帰国者に対しては、一切の公的支援を行なわなかった。国費同伴帰国の 2 世も、日本生まれ・日本育ちの日本人に比べれば、様々な困難・ハンディを抱えている。私費呼び寄せの 2 世に至っては、生活のあらゆる側面で深刻な疎外状況がみられ、その苦難は 3 世の生活・教育にも大きな影響を与えている。残留日本人問題は、すでに高齢化した 1 世の死とともに終焉するわけではない。形を変えながら、着実に次世代へと引き継がれつつある。

(8) 現在、夜間中学において生徒の約 4 分の 1 は中国語を母語とする人々——中国残留日本人・日系人をはじめとする——である。彼・彼女らには、中国語の読み書きが困難な者も少なくなく、夜間中学で①日本語、②識字、③中学生としての基礎学力の 3 つを同時に学びつつある。現在の日本で夜間中学は、残留日本人・日系人にとってほぼ唯一の実践的に有意義な日本語教育機関である。しかし同時に夜間中学は、単なる日本語教育機関にとどまらない。残留日本人・日系人の生徒の多くは、夜間中学の成果を、①基礎学力の養成、②新たな社会関係の構築、③自信、自己尊重、主体的な生き方の獲得、④学ぶこと・成長すること自体の価値の自覚等、極めて多面的に評価している。夜間中学校は、戦争等の影響で一般の義務教育を受けられなかった国民への補償にとどまらず、新規入国定住者の増加・多文化化が進む新たな時代の日本の学校・義務教育の再構築に向けた模索の一つといえよう。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

1. 修岩・浅野慎一「祖国と越境—中国残留日本人孤児の永住帰国」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』3-2, 2010, 査読無、135-154 頁
2. 浅野慎一「中国残留日本人孤児問題は解決したのか?」『飛礫』62. 2009, 査読無・依頼論文、123-129 頁
3. 浅野慎一・修岩「血と国—中国残留日本人孤児の肉親捜し」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』3-1. 2009, 査読無、115-133 頁

4. 佟岩・浅野慎一「ポスト・コロニアルの中国における残留日本人孤児」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2-2, 2009, 査読無、157-176 頁
5. 浅野慎一「中国残留日本人孤児にみる貧困—歴史的に累積された剥奪」『貧困研究』3, 2009, 査読無・依頼論文、65-72 頁
6. 浅野慎一「激動の6年余、道は半ば—中国残留日本人孤児の国家賠償訴訟、新たな支援策、そして現状」『法と民主主義』431, 2008, 査読無・依頼論文 58-61 頁
7. 浅野慎一・佟岩「中国残留孤児の『戦争被害』—置き去りにされた日本人の戦後処理被害」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2-1, 2008, 査読無、193-212 頁
8. 浅野慎一「中国残留孤児の生活と新たな支援策—聞き取り調査をふまえて」中京大学法科大学院法曹養成研究所『CHUKYOU LAWYER』7, 2007, 査読無・依頼論文 11-23 頁
9. 浅野慎一「中国残留孤児に新たな給付金制度を一人間の尊厳を回復する支援策のために」『法と民主主義』418, 2007, 査読無・依頼論文 66-69 頁
10. 浅野慎一「異国の父母—中国残留孤児を育てた養父母の群像」『地域社会学会年報』19, 2007, 査読無、193-194 頁

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計4件）

1. 蘭信三編『中国残留日本人という体験—「満洲」と日本を問い続けて』勉誠出版、2009, 192-207 頁
2. 関亜新・張志坤『中国残留日本人孤児に関する調査と研究』（佟岩・浅野慎一監訳）全2巻、不二出版、2008, 全906 頁
3. 浅野慎一・岩崎信彦・西村雄郎編著『京阪神都市圏の重層的なりたち—ユニバーサル、ナショナル、ローカル』昭和堂、2008, 全592 頁
4. 有末賢編『都市の生活・文化・意識』文化書房博文社、2007, 19-73 頁

〔その他〕

報告書

1. 浅野慎一『中国「残留日本人孤児」の生活の現状と新たな支援策に関する調査報告書』2008, 全57 頁

記念講演

1. 浅野慎一「中国残留日本人・日系人と夜間中学」第55回全国夜間中学校研究大会、2009年12月4日 神戸市総合教育センター

ホームページ

1. 神戸大学最前線 浅野慎一「中国残留日本人の人生から学んで」

<http://www.kobe-u.ac.jp/info/magazine/forefront/11/introduceresearch-Prof-asano.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅野 慎一 (ASANO SHINNICHI)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：40202593